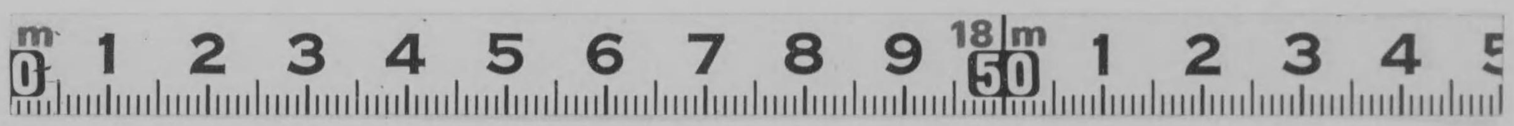
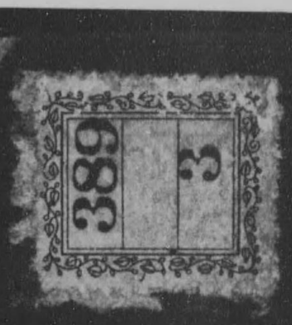

m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 m 50 1 2 3 4 5


389
3

最新學藝叢書

第十二編

民族自決主義

文學士 坂井正一編

東京 學藝書院

389-3

最新學藝叢書發刊の辭

世界は新たに改造せられんとす。

此の時に方りて、政治問題と云はず、社會問題と云はず、一切の人文科學に涉る當面の諸問題は、陸續として吾人の生活に迫り來る。

斯る空前の一大轉機を眼前にして、吾人は精神的にも肉體的にも、豫め備ふるところ無くば、遂に時勢に後れたる敗者として、人後に落つるや必せり。

今日新思潮新傾向を傳ふる書、無きに非ずと雖も、其

大正
9. 1. 28
内交

の内容雷霆に過ぎ、尨大に失し、價格高きが爲めに、繁忙なる一般民衆の要求に應ずること能はざる憾あり。

乃ち、玆に各專門の博士學士に依囑し、最新學藝叢書を發刊して、今日の生活に基礎として必要なる百般の大問題を提へ、之を解釋し說明し、何人にも解し易き程度に、新宇宙の眞理を傳へんとす。

大方の諸君子願くは愛讀を賜へ。

大正八年七月

學藝書院白

序

『民族自決主義』といふ言葉は、かなり新らしい言葉であります。一體この言葉は何を意味するのでせう——何時頃、誰に依つて唱へ出された言葉でせう。

この本は、右の疑問に對して平易な解釋を與へやうとしたものです。

只、お斷りして置かねばならないのは、民族自決を理解するためには、どうしても廣義の民族主義、民族問題に涉

つて深く知つて置く必要がある點から、本書はこの方の記述をも出來るだけ詳しくしたといふことです。

編者識

民族自決主義　目次

一　世界大戰の主潮……一
二　民族自決とは何ぞ……六
三　愛蘭の革命、チエック・スロヴァツクその他……一一
四　巴爾幹半島……二三
五　露西亞民族と自決主義……二九
六　波蘭獨立宣言……三一
七　芬蘭……四三
八　白露西亞・リシユアニア・レツトニア……四八

九　ウクライナ……五六
十　韃靼人と高架索人……六五
十一　猶太、自由を得たり……七一
十二　民族と國家……八七
十三　君主中心より民族中心へ……九七
十四　日本と民族主義……一〇三
十五　民族自決一括……一〇九

目次畢

民族自決主義

文學士　坂井正一編

一　世界大戰の主潮

千九百十四年六月二十八日、セルビヤの一青年ガヴリオ・プリンチプが墺匈國皇儲フランツ・フエルヂナンド大公夫妻に向つて投じた一個の爆彈は開史以來未曾有とも稱すべき世界的の大戰爭を惹起したのであつた。

一個の爆彈！

單なる一個の爆彈が何故かゝる大々的の戰爭を誘引したのであらうか。そこには種々樣々の事情が纏綿してゐるであらうし、枚擧に遑なきほどの澤山の理由も介在してゐるであらう。その間にあつて各國の底を流るゝ共通の原因は『民族』に關する處のそれであると言ふことが出來る。

卽ち、露國の參加はスラブ族のためであつたに相違ない。伊太利の出馬は所謂未回收の伊太利のためであつた。開戰當時既にこの大戰爭をパン・スラブとパン・ゲルマンの衝突と解釋されたところに民族的の色彩を生じてゐたのである。

從來の戰爭は殆んど國と國との爭ひであつたが、今度のそれは民族的になつて來たのであつた。希臘の戰爭に參加しやうとしたのも土耳其領にゐる希臘人が救つて希臘國を統一しやうといふ意見からであつた。

世界大戰の主潮は民族主義である、といふことが出來る。

＊

一方、開戰當時獨逸軍のために中立を侵された白耳義が、その國土の殆んど全部を失つたにも關らず依然一の獨立國として存在してゐたことや、セルビヤが全然國土を失つて一時希臘の一島コルフにその政府を持つてゐたことなどは、國と國土との關係に新らしい事實を提供したと言ひ得る。

――國土を失つたことが必ずしも國の滅亡を意味しないといふこと。

――國土を侵略しても、それが民族中心でなければ決してそのために自國が大きくなつたといふことは出來ないといふこと。

かかる事實を示したのである。

尤も從來とても猶太民族の如く、亡國の民族にして國土を持たぬ國はあつて、彼等も幾度か再建を計畫したのであるが、やはり國土そのものを主としたために現出させるに至らなかつたのであつた。

然しこの白耳義、セルビヤの事實は彼等を自覺せしめた。一國を組織するに最も主要な部分は民族そのものであることを知つた。そしてこれは世界の思想となつた。

卽ち、國を組織する上には言語を同じうし、血液を同じうすることが何よりも必要である。出來得るなれば信仰を同じうすることが、更に一層理想的である、かくしてこそ內容の充實した强固の國家を形成することが出來る、といふのである。民族主義の概念は、これに依つて大略を知ることが出來るであらうと思ふ。

＊

民族主義と一概に言つても、これは見方に依つて二つに區別することが出來る。一は積極的民族主義、他は消極的民族主義である。

前者は、强大なる民族がより多くその版圖を擴張して、富と民とを增大せしめ、これに依つてその民族を發展させやうとする——獨逸の如きものを指す。

後者は、久しい間他國の勢力の下に壓迫されてゐた民族が、過去の狀態を復活せんことを望んで、自由開放を得やうとする處のものである。

民族主義運動として、目下盛んに論じられてゐるのは主として後者に關してゞある。そして『民族自決』とは、民族主義的整理に關する一の手段である。

然らば、民族自決の由來するところは何であるか。

二　民族自決とは何ぞ

民族自決は、千九百十五年九月、瑞西のチムメワルド市に開催された國際社會主義者大會に於て、世界大戰に對する講和の基礎條件として初めて叫ばれたものである。

これを唱道するところの彼等は言ふ——民族自決主義は講和を完成するための大なる要件の一である。弱小民族は自由に開放されねばならない、各民族はその欲するところに從つてその政體を定め、同時に獨立か從屬かをも決定することが出來る。

然し、民族自決は小國の自治のみを意味するのではなく、同民族との協合をも意味するのである。强國の間にあつて、競爭することの不可能な小國の獨立にのみ關する主義であるといふやうに誤解して、これを排斥するものもあるけれど、これは民族自決主義を自治と解釋する誤りから生じたものであると思ふ。

民族自決主義は、領土の變更は住民の一般投票に待つといふのであるか

ら、理論としては十分首肯することは出來るが、さて愈々これを實行して人民の自由意志が完全に投票されるであらうか、樣々の弊害が――例へば干渉といふやうな事がありはしないかゞ危ぶまれるのである。

＊

然しながら、今度の露西亞革命の最初に於てこの民族自決主義は社會民主派の採用するところとなつた。彼等は、これを勞兵會を通じて各國民に對して、無併合無賠償といふ條件と共に提議したのであつた。

米國大統領ウヰルソンも『如何なる人民も、その下に生存することを望まない主權の下に强いらるべきではない』と言つて、この民族自決主義に贊成した。かくて、この主義は愈々天下の耳目を聳動するに至つたのである。

勿論、かくの如き主義を實現するに際しては、そこに幾多の困難もあらうし、また民族自決といふ言葉そのものゝ解釋に對しても樣々の異見もあるに相違ないけれど、兎も角も露西亞の社會民主派に依つて率先されてこの主義が叫び出されたといふのには、一理ある。

＊

露西亞に於て、これまでの帝政時代に內亂の絕えなかつたのは、單に紳露西亞民族殊にその中の知識階級の人々が、その政體に對して不滿を持つてゐたことばかりが原因ではない。

露西亞が、今まで種々雜多の民族から成立してゐたことは今更言ふまで

もないであらう。政府は、かゝる數多の民族を統一して、そして一の國家を完全に形成しやうとしてゐたのである。それがためには隨分强壓な手段を用ひてまで、總ての民族の純露西亞化に努力したのであつた。この目的のためには人種の如何を問はず、歷史の如何にも關せず、宗教の如何をも顧みなかつたのであつた。

帝政時代に於る露西亞內亂の原因の主なる一つは、實に、大露西亞政府に對する異民族の反抗であつた。革命黨員の中に多數の猶太人や高架索人や波蘭人がゐたのに見ても、この事實は明かである。以前、露西亞の議會には少數の異民族の代表者がゐたが、その人々はみな反政府黨であつた。

かくの如き過去を持つてゐる露西亞である。革命が突發して、帝政が轉覆され、そして社會黨に依つて民族自決主義の叫び出されたのは、當然過ぎるほど當然なことではあるまいか。

＊

民族自決の家元だけあつて、露西亞では各政黨が總てこの主義を主張し國內の民族はみなこの主義を叫んで既に自決の形式を發表してゐる。芬蘭波蘭、エストニアなどは最早獨立を宣言し、高架索、韃靼、ウンライナなども亦この運動を開始してゐるのである。

三　愛蘭の革命、チエツク・スロヴアツクその他

＊

大戰の主潮が民族主義であることは前に述べた。各國の參戰も多く民族的の立場から出發し、大戰の解決も亦民族主義に關すること大なるは明かである。

こゝには先づ各國の民族主義運動に就て述べて見やう。

＊

英國の民族主義運動は愛蘭に存してある。それはシンフエン黨の出現に依つて見ても明かである。英國は、愛蘭の自治問題には久しいこと惱まされてゐるのであるが、シンフエン黨は愈々民族主義に依つて共和獨立を主張するに至つた。そして、獨立の協議會を形成して愛蘭の獨立を列國に承認せしめやうと努力してゐる。

愛蘭の革命運動は二種の陰謀から成つてゐる。その一は獨逸が愛蘭の謀叛を煽動しやうとする企、その二はこの企を實行するために愛蘭で準備をすることである。

シンフエン黨幹部と獨逸との間には、三年半に亘つて絶間なく商議が重ねられたらしく、獨逸はこの叛亂のために兵器爆藥を送り出す準備まで出來てゐたのである。獨逸がかくの如くしたのは、愛蘭に潛航艇の根據地を置て各國の商船を威嚇しやうといふ野心があつたからである。

＊

然るに昨年五月十八日の夜、愛蘭總督は大檢擧を行つて、シンフエン黨の首領ジョン・ド・ヴァレラ、アーサー・グリフィス、マルキエヴィチ伯夫人

等の諸名士が續々と逮捕され、拘禁さるゝ者百名を超えたのであつた。

かくの如くしてシンフエン黨の叛逆計畫は何等爲すところはなかつたのであるけれども、愛蘭の反英熱は愈々その度を增して行く。

ロイド・ジョージ内閣は、愛蘭民心の不穩なのに鑑みて、同國に徵兵法を施行することを延期したけれど、政府の面目を維持する上から募兵制度に依つて豫定の人員を出させやうとして、募兵官を派遣して盛んに遊說させることにした。然し事實に於ては牧師オフラナガンに引率されるシンフエン黨の妨害運動が激しく、一方愛蘭國民黨も表面的にはシンフエン黨を攻擊しながら、その實はこれと提携して反英的の態度を取つてゐるために、政府の計畫は美事に失敗してしまつたのである。

獨逸に於ての民族主義的運動は、東に波蘭問題があり、西にアルサス・ローレン問題がある。

波蘭に就ては項を改めて詳述するが、その昔の一大王國であつた波蘭は幾度か分割の悲運に逢ひ、獨逸の如きはあくまでその獨逸化に努力し、强制的にその土地を買收し、波蘭語の滅亡を企てた程である。

アルサス・ローレン二州が歷史的の立場から論じて佛、獨の何れに屬するか、又この地方にはどちらの國民の數が多いかなどに就ては言ふことを省くが、只佛國はそこに自國の思想と文化とに共鳴する民族があつて、それが奪取されたのだといふ感念に民族主義は立脚するのである。今度の講

和が批准されゝば獨逸はこれを佛國へ還附せねばならなくなるであらう。

＊

墺匈國内に於ける異民族は、戰爭倦怠や食糧欠乏やに依つて最近その民族運動は愈々激しくなつた。

墺國にはボヘミヤにチエック族がゐる。

チエックは紀元六世紀頃小露西亞地方から今のボヘミヤ地方へ移住して來た民族で、現にチエックの首府はボヘミヤのプラツグである。チエックと共に、チエック・スロヴアツクと一言に呼ばれてゐるスロヴアツクといふのも全然チエックと同一の民族である。

大戰勃發後チエック・スロヴアツク民族は直ちに聯合側に立つて墺匈國及び獨逸に對して反抗運動を喚起した。その民族の軍人は戰を拒絶して團體を作つて捕虜となりそして聯合軍中にあつてチエック・スロヴアツク軍を編成した。民族運動は激烈で、これに對する嚴刑主義も絞刑も、銃殺も、財産の沒收も公民の監禁も何等の効を奏さなかつたのである。

かくして國内にある全民族の一致を以てチエック・スロヴアツク國民會議が形成された。そして獨立を宣言した。千九百十八年十月十八日巴里に於ける本部は獨立宣言書を發表したのである。その國民憲法の主要なる點として宣言書に摘記されたものは次の如くである。

一、チエック・スロヴアツク國は共和國たるべきこと

一、進歩のために不斷の努力を爲し以て良智宗教科學文學美術辯論出

版等の自由並に集會及び請願の權利を完全に保障すること

一、政教は分離すべきこと

一、小數者の權利は代表權に依つて保護さるべきこと

一、吾人は婦人參政權を信ず

一、政府は代議制たるべく且つ立案權及び一般投票權の主義を承認すべきこと

一、常備軍は國民軍に置換せらるべきこと

一、我が國民は墺匈國の公債の一部を引受くること

一、吾人は全然國家の民主的及び社會的主義を承認し且つ一切の協約及び條約は秘密的外交を以てせず公然率直に行ふ主義を採用すること

一、一切の特權を排し且つ階級的立法制度を禁ずること

一、軍國主義は壓制せられ民主主義は勝利を得たり、人類の團體はこゝにその組織を新にすべし、闇中の力は權利の勝利を齎らせり、幾世紀の間翹望せられたる人道の時代は漸く明けなんとす、吾人は民主々義を信ず、自由――永遠の自由を信ず

匈牙利には、ルーマニア國民と言葉も血液も同一であるルーマニア人がその國の東南トランシルバニアとして知られたカアパアシアン山脈とダニウブ河の間にある山地に住んでゐる。このルーマニア人が現在のルーマニア王國と合併すればその國は强固なものとなるに相違ないのである。この

地に居住するルーマニア人は約三百五十萬人と言はれてゐる。

大戰起るやルーマニアは、先づトランシルバニアその他の墺匈國内の自民族領域を囘收せんがために立つたのであるが、忽ちにして失敗し、一時は本國すら危險狀態に陷入つたにも拘らず、露國革命に次で最近墺匈國解體の兆候歴然たるに及んで、その民族領域を囘收することも可能らしく見えるに至つた。

ルーマニヤ人の民族としての發展の根據地は、トランシルバニアであるといふことが出來る。この地に於ける人々が同じ民族の中では一番辛酸を嘗めて來てゐる。

今や端無くも大ルーマニヤ國實現の機運は到來した。久しい間の壓制に苦しめられた墺匈國内のルーマニア人は愈々自由を得て歸屬しやうとしてゐる。

＊

墺國の南部及び西南部にあるスラボニア、ボスニア、ヘルチエゴビナ、ダルマチヤの一部には主としてセルビア人が住んでゐる。セルビア國人と人種も言語も同一である。

墺匈國の西南、トレンチノには澤山の伊太利人が住んでゐる。政治上から言へば墺國チルロの一部であるけれど、種族性格から言へば全く伊太利人と同じである。

トリエスト半島にも伊太利人が多く住んでゐる。アドリアチック海の諸

島、ダルマチアの海岸にも住んでゐる。これらは總て昔のベニチア自由共和國の一部であつた。これらの民族が墺國を離れて伊太利に赴かうとするのは當然のことである。

四　巴爾幹半島

民族移動の激しかつたことに於て、從つて現在に於て幾多民族の混在と宗教、言語、風俗の交錯してゐる點から見て、巴爾幹半島のやうなものはない。

こゝには現時に於る巴爾幹諸民族に就て少しく述べて置かう。

スラブ族――その昔彼等は歐洲の内部まで擴張した一大民族であつたが日耳曼民族の壓迫のために再び東方に轉じ今の露西亞の中央ドニエープル流域をその根據地としてゐたものである。その後匈牙利民族がその居住地に侵入したゝめに南北に分れ、南スラブ族と北スラブ族と區別されるに至つた。

現今、北スラブにチエック・スロヴアツクを併せて北スラブ合衆國の成立を想像することが出來ると共に、セルビア、クロアート、スローテン人を含む南スラブ合衆國の成立も、想像することが出來る。大戰に伴つて唱導されつゝあるところのユーゴー、スラブ運動といふのはこれで、萬一南

力スラブが完成するに於てはその人口約七百萬、聯合側に取つて如何に力強い存在であるかは言ふまでもないのである。

＊

ブルガリア――これは十三世紀の時代には大層な勢力を持つてゐたのであるが、それから久しい間土耳古の支配の下にゐたので、自由國民としての存在は、漸く露土戰爭後のことである。

性質慓悍にして敵愾心に富み、覇氣がある。總人口約六百五十萬のうち四百萬が本國に住んでゐる。

＊

セルビア――セルビア人は本國は無論だがその他モンテネグロ、墺領ボスニア、ヘルチエゴビナ、ダルマチア、スラボニアなどに住んでゐる。巴爾幹に移住したスラブ族の中最も早く發達して一國を建てたもの〻後裔で數百年間オスオン帝國の一州であつたのを、伯林條約に依つてその獨立を承認されたのである。その間常にブルガリア、ボスニア等のスラブ族と協力して土耳其に反抗し屢々反亂を擧げて、一日として平和な日はなかつた程であつた。

現在の總人口約八百二十五萬のうち、本國に二百七十五萬、モンテネグロに二十五萬、その他は各地に散在してゐる。

＊

アルバニア――アルバニア人の多數は昔から今に至るまでアルバニアの

山地に住み、他の民族を混合すること殆んど無く、今なほ昔の風俗を脱しない民族である。然し、國人の中でも海外に移住したものはその文明に同化し、土耳其の朝野にあつて重要の位置を占めてゐるものも少なくない。

その人口約二百萬、本國に住む者百二十萬、その他は希臘、南伊太利、シシリィ島などに住み、その多くは回々教を信じてゐる。

＊

ギリシア族――希臘人も亦スラブ、アルバニア人、土耳其人など各種民族と混合した一混血種で、僅かに多島海諸島及ひ小アジア沿岸の地方に少數の純希臘民族の子孫が存在するほか、大抵その本來の特質を失ひ、單に言葉や風俗や宗教の上で希臘系に屬するに過ぎない。

總人口約六百萬、本國に住むもの二百五十萬のほか歐洲土耳其に百五十萬、小アジアに百萬ゐる。土耳其帝國に於る主要民族の一である。

この國は自然的境界を有して王國を作つてゐる。

＊

オスマン土耳其族――今の土耳其人はその昔中央亞細亞に遊牧した支那人の所謂突厥卽ち土耳其族の一支族で、十三世紀の初め蒙古族のために逐はれて小亞細亞に移住したのであるが、オスマンといふものが今の土耳其帝國の基礎を建てゝからオスマンリーと自稱しオスマン土耳其と呼ばれるやうになつた。その後歐洲に侵入して巴爾幹半島を併呑し、此處にその居を定めて以來、他の異民族と混血して今では純土耳其の特長を失つてしま

つたのである。

現在その總數九百五十萬に達し、歐洲土耳其には二百五十萬、小亞細亞には七百萬住んでゐる。然し巴爾幹に於ては君府、アドリアノープル市を除いて、土耳其人と自稱するところのものゝ多數は、囘々教を奉ずるとは言へ、それは外面的で、實際はブルガリア、ギリシア、スラブ人などの背教者の子孫で、眞の土耳其族ではない。

であるから彼等の眞の根據地と言へば小亞細亞を指す方が本當であらうが、こゝにも亦アルメニアやギリシヤ人等の種族がゐて勢力を持つてゐるかくの如き狀態であるからオスマン族の將來は決して有望であるとは言ひ得ないのである。

土耳其にも民族主義はある。青年土耳其黨の奮起は卽ち土耳其民族主義を示してゐる。その運命は獨逸勢力の消長に密接な關係を持つてゐる。從つて聯合國側は土耳其を歐洲より驅逐せんことを欲してゐるのである。

五　露西亞民族と自決主義

＊

民族自決が露西亞革命に於て殊に高唱されたことは前に述べた。そして國內の各民族が續々とこの主義を謳歌して自決の形式を發表してゐることも前述の如くである。

ボルシエ井キーは、各民族が獨立して露西亞を離れやうとも、單に自治だけで滿足して從前の通り露の版圖にゐやうとも、各自の自由である。只各民族は必ず勞兵共和國であらねばならぬと言つてゐる。

社會革命黨、メンシエ井キー黨その他の民主各派は、各民族の自治を認めることは出來るけれどその獨立を許さず、露西亞を聯邦共和國たらしめやうとしてゐる。

只、立憲民主黨は、舊露西亞國を破壞するものとして反對してゐる。

＊

露西亞は歐亞に亘つて廣大な土地を持つてゐるので、これに住む民族も亦細別すれば數百種類に上る。その中程度の進んだ大種族だけでも四十からある。もし民族自決主義を極端に發揮し、これらの諸民族が總て自決權を要求するとなると、流石の大國も支離滅裂とならざるを得ないのである。

以下露西亞の民族と自決主義との關係に就て述べて見やう。

六　波蘭獨立宣言

＊

大戰開始後、露國前政府は對獨政策上の必要から、もし波蘭人が露國と協力して獨墺に對抗するならば、戰勝後に於て波蘭を自治國とし、獨墺に分割されてゐる舊波蘭王國の一部であるポーゼンその他を統一して波蘭國を再興せしめやうと約束したのであつた。

この數年間波蘭人が獨墺兩國に對して持つてゐる嫌惡不滿の感情は愈々激しかつたらしい。

彼等は、全波蘭民族の結合復歸を理想とし、露墺兩領域内の波蘭は言ふまでもなく、シユレジア、ポーゼン、ダンチツヒなど普魯西領舊波蘭を含む統一的の獨立國を建設し、日耳曼人マジャール人の束縛から逃れやうと望んでゐたのに關らず、獨墺兩國は露西亞の屈讓を好機として第四回の分割を波蘭に對して行はうとしてゐた野心が覆ふことの出來ない事實として現れかゝつて來たために、彼等は殊にその反感を增したのであつた。

これよりさき、獨墺がウクライナと中歐同盟との講和條約に於て、舊露領波蘭の固有版圖であるコルム縣の一部をウクライナに分割してやる約束をしてから以來、波蘭人の居住地域には何となく不穩の氣分が漂ふやうになつたのである。

その後、獨墺兩國の間に波蘭問題に對する新しい解決法に就て一の協定が成立したと噂されるに至つた――それは、露領波蘭の大部分を墺國に歸屬せしめ、普魯西は國境整理のために必要と思はれるだけの部分を獲得するといふ條件だ、と傳へられたのであつた。これが眞實だとすれば、千九百十六年の獨墺共同宣言が波蘭獨立を誓つた點を無視してゐるのであるから、波蘭人の忿怒は推察するに難くない。

かくて、事態の危險を見て取つた獨逸東方戰線總司令官レオポルド親王

は、ミンスク縣に屯在した波蘭軍隊の解散を命じたのであるが、これに從ふ者なく各處に於て獨兵と波蘭兵との衝突を惹き起し、ある場所では獨逸司令官が殺されたりしたほどである。

波蘭人の獨墺に對する惡感は愈々增したのであつた。

＊

波蘭は十八世紀の終りに露、獨、墺の三國が協同して分割してしまつたのであるが、露領になつてゐる地方だけでもその面積は約五萬方里、行政上十縣に區劃され、人口八千萬以上――隨分廣い土地である。

革命後は民族自決主義に依つて獨立運動を開始し、最近各國の承認保護の下に波蘭國の獨立を宣言することになつたのであるが、米國大統領はこ

れに對して更に『海への出口』の必要を說き、エルサイユの會議に於でも亦このウ井ルソン氏の言葉を是認して同一の決議をなしたのである。

海への出口――國家にして海への出口を持たないものは不完全なるものであること言ふまでもない。波蘭再興に際して逸早くウ井ルソン大統領がこの點に就て論じたのは誠に意義あることゝ言はざるを得ない。

新波蘭が單に舊波蘭全部の再現を意味するものなれば、一方はクールランドから西プロシアに至るバルト海沿岸と、一方はウクライナから黑海に臨むわけであるけれど、かくの如き解決は、聯合國の戰爭目的から見て有り得べきでない。聯合國は民族自決主義の上に立つてゐるがゆゑに、波蘭の再興も亦その民族の統一に根ざした解決に依らねばならないし、又海

への出口も同一であるべき筈である。

すると、黒海方面は小露西亞人の占めるところ、クールランドはレット人及びリトアンア人の占めるところ、これらの地方は新波蘭に屬さないことは明かである。

殘るのは東西のプロシアである。

新波蘭は、東西プロシアに於て海への出口を得ることが出來るであらうか、卽ち、ヴイクセル河沿岸は新波蘭の領となるべきであらうか、それとも從前の如く矢張り獨領のまゝであるべきであらうか。

＊

バルト海沿岸に對する獨逸の野心は隨分古いものである。千八百十五年のキーン會議に於ても東西プロシア問題に就ては露、普兩國の間に爭ひがあり、遂に露國はワルシヤウ地方を、普國は東西プロシアを得て終つたのであるが、殊にヴイクセル河口は露國が遠い昔から望んでゐる土地で、波蘭內地に對しては經濟的の咽喉である。

獨逸側からこれを見れば、獨逸がこの河口を得たのは經濟上に於て波蘭內地を左右することの出來る權利を得たに等しいし、軍事的には露國の侵略を不可能ならしめる點に於て大に有利である。

波蘭に於ける露獨間の關係は、ヴイクセル河沿岸に懸つてゐると言つて無理はないと思ふのである。

獨逸に取つて斯くの如く重要な土地であるがゆゑに、獨逸は盛んに波蘭

人の獨逸化に對して努力したが、樣々の方法も効を奏せず反つてこれに對抗する波蘭人の勢力の方が漸次強くなつて行く傾向を示すのであつた。

然しながら、東西プロシアが獨逸に取つて必要であつたのは、露國とその境を接するがためである。波蘭再興の目的は無論民族自決主義に基いて世界を改造せんとするものであるが、一方これを又露獨の間衝地たらしめんとするのも明かである。境を接してゐたがゆゑに必要であつた東西プロシアも、間衝地である波蘭に屬すといふことになるのなれば、獨逸はそれほどこれを固執しないであらう。

さすれば波蘭は、こゝに於て初めてその海への出口を見出すことが出來るのである。

然しながら東プロシヤに於ては、南半部に波蘭人が多く、それもポーレン本土に近い地方ほど人口の割合が濃厚であるが、一體に於ては獨逸人の方が多い、かくの如く見て來ると新波蘭は東プロシアに於ては到底海への出口を得ることが出來ない。

西プロシアはどうであるか。

ヴイクセル河は西プロシアを流れ、ダンチツヒ港もこゝにある。この地に於る民族的分布が新波蘭に不利である場合には、彼は到底海への出口を得ることが出來ないのである。然しこゝに於ては西端の一部を除くほか總て波蘭人が、その多數を占めてゐるのであるが、各方面より見て新波蘭國

の海への出口は、ヴイクセル河に沿ふ地からバルト海へ出ることだけが可能であることが分る。

＊

さて、舊波蘭は王國であつたが、今度再興する新波蘭は君主國たるべきか、共和制を敷くか、未だ決定してゐない。政治家の中には君主制を唱へるものが大分ゐるけれど、一般の農民勞働社會に於ては共和制を望んでゐる。

愈々獨立するとなると、從來の關係上臣籍問題が起ふ。これに對して波蘭國民委員會は各個人の隨意に任せてゐるが、これまでの儘露國の臣籍に留まりたいものは敢て復籍を強要しない方針である。

外國人で波蘭に歸化するものは、波蘭の公職に就くことは出來ない、歸化人と純波蘭人との間には政治的の區別を設ける、そして現在波蘭に居住する外國人――卽ち露西亞人の不動產は軈て露國政府と協議の上解決することになつてゐる。

土地に就ては、その國の政治家の多數は、國家が强制的に地主の土地を買收して、これを農民に與へるといふ意兒を持つてゐる。そして、一人の最大限度を四ヘクトール以內に定める筈であるが、これはいづれ憲法議會に於て最大土地所有權を決定し、それ以上は誰でも所有することの出來ないやうにするさうである。

＊

獨立するからには是非とも軍隊を編成せねばならない。戰時中に於て佛國軍へ志願兵として入隊した波蘭人は約五萬人、伊太利軍へ入隊したものが約三萬人、これは共に波蘭隊として特別の編成のもとに行動してゐたのであるが、講和會議の結果この八萬人の波蘭軍は新波蘭へ送還されることになつた。そしてこれらの兵士は、ダンチッヒ港から上陸して西プロシアの一帶に駐屯し、ヴイクセル河に添つて敷設されてゐる鐵道を占領し、これに依つて海國に通ずる波蘭の地域を守備し、その地方に於る住民の安寧秩序を維持し、生命財産を保護してゐる。

西伯利に住んでゐる約二十五萬の波蘭人も既に軍隊を編成してゐるが、これも遠からずして祖國へ繰り込む覺悟である。

波蘭とこれに隣接してゐる白露西亞とレットとの三國の合併問題も起つてゐるといふことだけを書き足して置く。

七　芬蘭

芬蘭は露西亞の西北端にあり、瑞典と隣接した十四萬四千方哩からの面積を持つた國である。

湖國と呼ばれてゐるほど、全國至るところに湖や沼が澤山散在して、道路も鐵道もその間を縫ふやうに通つてゐるのである。夏期に於ては絶好

の避暑地であるが、冬になると總て氷と雪で覆はれてしまふ。

人口約三百萬、全國にわたつて湖や沼の多いために農業よりも漁業が盛んである。より以上工業はこの國の誇とするところである。

＊

千八百九年露國の版圖に併合されてからも芬蘭大公國として自治體を保ち、特種の議會があつて行政權を持つてゐるのである。そして露國政府は特に芬蘭大守を任命して行政施行のことを監督せしめ、軍事と外交だけを直接露國政府が支配してゐたのである。であるから、芬蘭人はその手で軍隊を編成することも、外國と自由に外交關係を結ぶことも出來なかつた。

＊

然しながら國民教育の發達してゐることは露國内第一位と言つていゝ位で、國民は殆んど全部文字の知識がある。從つて教育機關も完備し、大學もある。

早くから普通選擧制を採用したので、男女の別なく選擧、被選擧の權利を有し、議會には婦人代議士が少くない。

芬蘭語は露西亞語とは別のもので、瑞典話によく似てゐる。芬蘭語の百科全書さへ出來てゐる位である。

容貌も一見して露西亞人や他の西洋人と違ふことが分る。毛髮も黑いし目鼻立も餘程亞細亞人種の方に近い。人種學上から言ふと芬蘭人はウラルアルタイ族卽ち蒙古人種の部類に入つてゐるので、同國を旅行する日本人

はよく芬蘭人と間違へられるさうである。

＊

政黨では民主派に勢力がある。

以前は有產階級の民主派が政界の權利を握つてゐたけれど、革命の後はやはり社會民主派がそれに代つてゐる。

露國に合併される以前は瑞典と密接な關係があつて、言葉から風俗まで瑞典系統であるから、政黨の中にも瑞典派といふ分子があつて瑞典との合併を叫んだり、瑞典の保護のもとに屬すべき運動をしたりしてゐる。

下級の勞働者の間には多少ボリシエキズムが普及してゐる。

芬蘭人の獨立運動は隣分盛んであつた。千九百五年から七年にかけて、

日露敗戰の結果露西亞に第一革命運動の發生した際には、芬蘭人は露國革命黨と相呼應して激しく獨立運動を試みたのであつた。然しこの時の目的は獨立よりも、完全な自治權を得て自國を立憲國にしたいといふのがその目的であつた。

今度の革命の後、ボリシエヰキーが頗る盛んで國內混亂を極めたが、軈て過激派の勢力が失墜するに及んで社會民主黨が政權を握り、自族自決主義に依つて獨立を宣言したのである。そしてヘルシングフォルス市に政府を組織し議會を設けて、列國に對して獨立承認の運動に着手したのであつた。

＊

こゝに於ても亦獨立の上は君主國たるべきか共和國たるべきか、二つの道に輿論が分れてゐる。芬蘭軍の總指揮官であるマンネルハイム將軍は共和國を唱道してゐる。君主國を主張する者はやはり有產階級の者に多い。軍隊は、現役が約二萬人、豫備が約六萬人位ゐる。現在に於ては米國から穀物その他の食糧品の供給を受けてゐるさうである。

八　白露西亞・リシユアニア・レットニア

＊

白露西亞人は大露西亞と波蘭との間にある白露西亞に住む。モギレス、井テブスク、グロドノ、ミンスク諸縣に亘つてその人口二百五十萬に近い。言語風俗は小露西亞のそれに近い。

然しこの地は面積の點から言つても、人口の點から見ても、地理的關係からしても到底獨立し難い位置にゐるので、愈々獨立するとしても隣接せるリシユアニアと合併するか、それでなければ波蘭、リシユアニアの二國と合併するかして一の獨立國を建設しやうと望んでゐる傾向もある。

尤も昔は白露、波蘭、リシユアニア三國合併して一の國を成してゐたのであるから、もし白露にして露西亞を脫しやうとするならば、どうしてもそれらの國と合併するほかあるまいと思はれるのである。

＊

千九百五年に白露、リシユアニア兩地方の代表者の特別會議が開かれて

兩國の將來に就て相談したことがあつて、その當時は共に合併して一國を創設しやうと決議したのであつたが、その後どうしたか。其後の革命後に於ても白露はまだ何等の意見をも發表してゐない。

けれどもリシユアニアと白露とは、その人情風俗がよく似てゐる點から白露は露西亞から離れてリシユアニアと合併することを希望し、合併の可能を說くものが多い。

かくしてくると、白露が單獨に獨立することの難かしいことが分つてくる。白露は露西亞聯邦の一として自治權で滿足するか、それでなければ前述の如く波蘭またはリシユアニアに合併するよりほかないと思ふ。

白露西亞といふ名稱は、その土地の人人が夏と冬に限らず常に白い着物を着てゐるところから得たものだらうと言はれてゐる。

久しい間波蘭貴族の壓迫の下にあつた痕跡が今もなほ殘つてゐて、生活狀態などもかなり低い。だから國民的自覺も未だ薄弱なものであるらしい。

リシユアニア

＊

リシユアニアは中世の强大な公國で、一時は西南露西亞の全部を併合したこともあり、ある時は征服した露西亞民族の影響を受けてその言葉を取り、その文明を繼がうとさへした位であるが、その公位が波蘭の王位と合

するやうになつてから、領土は波蘭のものに歸し、その後波蘭分割の際に再び露西亞の版圖に入つたのである。

北はフィン種族に接し、南は白露西亞に境して、婆羅的沿岸に住んでゐる。リガ、コウノ、ミタワ等の都市もあるが總人口は約四百萬位である。

この民族は印度歐羅巴民族で、言葉はかなり露語に近い。古代アリヤン言語の面影を殘してゐる點から見ると印度古代の梵語に近いとも言へる。

レットニア

＊

レットニアには非常にボリシエヰズムが普及してゐる。この國の青年達には熱心なその主義の信奉者が多い、勞農政府の親衛隊としてレーニンやツロツキーなどの警戒の役に當つてゐるのがレットニアの軍隊で、レットニア軍と言へば一般赤衛軍の中では最も威張つてゐるものである。

農民の間には過激思想はあまり侵潤してゐない。然し大體から言つて今度の革命以來最も盛んにボリシエヰズムの流れてゐる地方の一であることは爭はれない。

＊

レットニアは露語でラトヰアといふ地方を指す。その人種をラツイシと呼ぶ。婆羅的沿海の他の各州と同じやうに、昔から露西亞よりも獨逸の勢

力の方が擴がつてゐる。だからこの地方の貴族達は激しい親獨派で、大戰中も獨逸に對して好意を盡してゐた。

人種はチユートン族で、言葉も風俗も獨逸系であるから、どちらかと言へば獨逸の領地となつてその政府の保護を受けてゐたいと望んでゐた位である、が輿論は二つに分れてゐて、一は民族自決主義に依つて露國から分離し獨立國とならうと主張するもの、他の一は今までのやうに露國の版圖にあつて露國聯邦の一つとなるか或ひは自治權を得ることだけに甘んじやうといふのである。

然し萬一レットニアが獨立するか自治國となるかする場合には、この國の境界は南ペルノフからクールランド全部を併せ、リブリヤンドの南部とウイデブスク縣の井ンダワ、ミタワ、リガー地方もその範圍に入ることになり、その人口は殆んど二百萬に達するであらう。そしてその九割五分は純レットニア人を以て占めることが出來る。

＊

獨逸や露西亞のために昔から非常な壓迫を受けて來たので、國民は君主制を望まず、みな民主制を欲してゐる。

又この國には大地主といふものがないから大きな土地問題は發生しないだらう。農民は大抵土地を持つてゐて、地主と言へば獨逸人だけである。遠からず議會に於ては土地買收案が提議されるらしいが、個人の土地所有權はやはりその儘に置かれるであらう。

この國には前政府の頃から約二萬の國民軍が編成されてゐて、その中のある者はボリシエヴキーとなつて赤衞軍に投じたが多くは本國にあつてその任に服してゐる。

九　ウクライナ

＊

ウクライナといふ露語は疆域または邊境の意味である。世人の耳に新らしいこの名は新設の國家の名稱としては大層便利であるに相違ない。

ウクライナとは、今回獨立を宣言した小露西亞の總稱である。この地方は韃靼文明の中心地であるばかりでなく、ドニエプル河畔に榮えた小露西亞文明の搖籃地である。

初め露西亞文明の起源はノウゴロッドで、それからキエフに移つたのである。キエフは元來小露西亞人の主府であるが、千百七十年ウラヂミルに新都を作り、千二百三十七年韃靼人に侵略されてからは全然韃靼の文明の中心地として見られ、十四世紀の頃にはウクライナ地方はリタウと呼んでゐたのである。

韃靼の勢力が衰へてから又更に小露西亞の名を恢復し、千三百九十六年には波蘭人に征服されてその屬領となつた。千六百九十六年キエフが露西亞の手に落ち、千七百九十三年波蘭第二回分割の際は「波蘭ウクライナ」と稱してゐたウオルヒニア、ボドリア、キエフが露領となり、千八百一年固

有の小露西亞と合して露領小露西亞と呼ぶに至つたのである。

ロマノフ朝廷は極端にウクライナ人を壓制したために、ウクライナ人は人に對して好感を持たなかつた。また波蘭人にも苦しめられたためこれに對しても反感を持つてゐたのである。

＊

ウクライナの土地は、西はドネープル河を境として遙かに墺匈領のブコ井ナ、ガリシア、ホルムシチナ地方を包有し、北はチエルニゴフ、キエフ、ボルタワ諸縣からクーラ、オロネージ縣の一部を併せ、更にドン地方まで擴がつてゐる。

この地の大部分は、ヅニエプル河を中心とする所謂黑土帶を組成し、地味肥沃なるがために至るところに小麥を產し、その大部分は外國に輸出される。その他ベサラビアには玉蜀黍を產し、キエフ、ボドリアは南部露西亞糖業の原料たる甜菜糖の栽培地として有名である。また一般に於ては牧草の產出を以ても知られてゐる。

かくの如く農業地として著名であるばかりでなく、鑛業地としても亦、工業の發達から見ても大露西亞に劣らない。

都會には黑海沿岸のオデツサ（人口六十二萬）キエフ（五十五萬）ハルコフ二十五萬）エカチエリノスラウ（二十二萬）キンネフ（十二萬五千）ニコライエフ（十萬三千）等があり、いづれも商工業の繁盛な都會としてこの地方屈指のものである。

またドネープル河畔一帶の地は、雪解の頃から一めんに綠の若草が萠えゴオゴリの詩嚢を肥した牧草地を至るところに見ることが出來るのであるこれらの牧草は、單にウクライナ地方の羊や牛を飼ふばかりでなく、遠くオデツサ港から外國へ輸出するのである。

＊

總人口約三千五百萬、その中約二割が大露西亞人その他の外國人が混入してゐる。

小露西亞人と大露西亞人とは、もとより同人種である。然し大露西亞——今日の中部北部の露西亞人種に依つて殖民されたのは十一、二世紀の頃で、それまでに、この地方に廣く散在してゐた芬蘭人種と或る程度までの混合を見た。

また、小露西亞は中部露西亞と共に久しい間波蘭の屬領となつてゐたり、中にもキエフ市の如きは地理的の關係から西歐文明に觸れる機會が度々あつたので、人種形態の上から見ても、風俗習慣の上から言つても、大露西亞人とは大分違ふ。

言語もわれらが普通露西亞語と呼ぶ大露西亞語と小露西亞語——ウクライナ語とは隨分違つてゐる。

こんな事情からして元來大露西亞と小露西亞とは非常に仲の惡い間柄であつて、今までの專制政府は同人種でありながら小露西亞に對しては苛酷の壓制を加へ、その文明の發達を阻害し、政治上の自由を許さないことは

言ふまでもなく、小露西亞の言葉で書かれた文藝上の作品などまで嚴禁するといふ風であつたのである。

これらのことは總てウクライナの反抗を喚起し、その住民に對して自由開放を憧憬させるのに十分であつた。革命成立して帝政轉覆するや、ウクライナが獨立自治のために奮起したのは實に當然過ぎるほど當然である。

＊

前にも述べた如く、この地方は農產物の殊に豐富な點に於て露國の穀倉とさへ呼ばれ、露國農產物の大半は小露西亞から產出するのである。

かくの如く農業國であつて、住民の大部分が小作に從事する農民であるから、土地問題は最も重大なものゝ一つで、將來に於ては勞農政府と同じく土地の私有權を廢し、强制的に地主の土地を沒收して、これを農民に分與すると言つてゐる。

これらの小作に從事する農民には貧困な者が多いので、革命以來ボリシエヰズムが驚くべきほど侵潤してゐる。小露西亞の主權が勞兵會の手に歸したことは一度や二度ではないのである。

最近に於ては勞農政府と同盟して、一體に勞兵會の勢力下に動いてゐるやうであるが、この國の將來に就ては豫想し難い。

政界も一般國民も、有產階級と勞働派とに分れて、常に反目し血を流し一勝一敗、內亂が絕えない。かくの如き狀態であるから、よし獨立するにしてもその基礎が確定するまでには尙ほ久しい時日を要するであらう。

＊

輿論は區々たる有樣であるが、然し最も盛んなのは獨立論で、純然たる小露西亞獨立國を組織して昔の面影を保つべきであるといふ意見が何よりも有力である。

單に自治體として露國聯邦の一部たることに甘んじやうといふ意見は、區國人の間には評判が惡い。

ところで、露西亞の政治家は小露西亞の獨立には贊成してゐない。小露西亞は大露西亞と同じ人種であるゆゑに獨立すべきではない、從前通り露西亞の一部として存在すべきが至當である、もし強ひて希望するとなれば自治權で滿足すべきであると言つてゐる。

然しながら、民族自決、民族解放は現代諸民族間の大勢である。そしてあちらでもこちらでも小民族が續々とこの主義を標榜して獨立してゐる際にあつて、小露西亞たるもの何すれぞ默止してゐられやう。

その委員は、目下巴里に在つて、專心獨立承認の運動に對して努力を續けてゐる次第である。

十　韃靼人と高架索人

＊

露西亞の領土内には澤山の東洋人種があるが、歐羅巴露西亞に於て最も多數のものを持つてゐるのは韃靼人であつて、これは一地方に集中しては

るないけれど全體に亘つて散在してゐる。幾分でも集合してゐるところを擧げれば先づクリミヤ半島を初め高架索、アントラハン、カザン地方などであらう。

かくの如く廣く散布されてゐるのであるから、これを統一するといふことは一寸出來ないであらうし、從つて韃靼人國の建設は難かしいであらうと思ふ。

彼等は總て十三世紀の頃露西亞に侵入した韃靼民族の後裔で、カザン、クリミヤ、アストラハンなど何れもその昔サライ朝廷から分離した韃靼王國の存在したところである。

韃靼王國と言つても昔は名ばかりの獨立國で、回々教の信徒であつた關係から後には土耳其の配下に屬したが、彼得大帝の時代に露國の版圖の内に入つたのである。今日でもクリミヤには韃靼王國の首都であつたバフチサライの宮殿の遺跡がある。

＊

韃靼人の知識文化の程度は低く、その大部分はその日暮しの貧民で、知識階級に屬すべき人が少ないのであるから、獨立は誠に困難なことに違ひない。

然しその民衆の間には獨立の聲が非常に盛んで、革命後に於て彼等の中の一部の人士は民族自決主義に依つて解放運動を起し、莫斯科に韃靼獨立期成同盟會を設け、韃靼語の新聞を發行したり、盛んに獨立運動に對する

努力を開始したのである。

高架索

＊

露西亞の革命と共に高架索問題が新しく重大な問題の一として發生して來た。高架索は地理上極めていゝ位置にゐる。即ち西には黑海あり東にはカスピ海あり、北は南露西亞の大平原に接し、南は土耳其、波斯と接してゐる。これが一度露の權利から逃れて獨立を宣するに及んで直ちに列强各國の競爭場となつたかの觀を生じたのである。

從來の高架索は、北高架索とトランス高架索との二つの部分から成立してゐて、前者の住民は殆んど露西亞人であるが、後者に於ては五十種からの種族が雜居し、從つて五十種餘りの言語が使用されてゐる。その中主なるものはヂョルデヤ人とアルメニヤ人と韃靼人の三つで、獨立の資格を備へてゐるものとしては先づヂョルデヤ人を採るべきであらう。

ヂョルデヤ人はトランス高架索のチフリス市を中心とする一帶の地方所謂ヂョルデヤに住んでゐる種族の總稱で人口約二百萬を算す。これは昔は獨立國として國王が戴いてゐたのであるが、今から六十年ほど以前露西亞に征服されたのである。

＊

大戰の開始された頃、トランス高架索は露西亞土耳其の交戰場となつて

るたのであるが、最近の革命に依つて露帝その位を辭すると同時に、高架索の太守にしてこの方面の軍司令官であつたニコラス太公は直に新政府を承認し、假政府から改めて軍司令官の任命を受けたのである。

そのうちに各地は追々混亂を極め、秩序は亂れ、無政府狀態となつて來たので、久しい間露西亞の虐政の下に忍んでゐた諸民族は、民族自決主義の立場よりして政治上經濟上の自治を要求するに至つた。

中にもヂョルデヤは率先して自治を主張した。彼等は先づ宗教の獨立を要求して、假政府の認容するところとなり、次で民族的軍隊の組織と、學校の民族化とを要求した。又この國の貴族地主は假政府の宣言に從つて、特權及び階級の廢止に同意し、更に土地財產をヂョルデヤ人全體のために提供したのであつた。

*

過激派の假政府が轉覆するまでのトランス高架索の要求は、單に自治の主張に過ぎなかつたけれども、これあつて後のその態度は一變した。過激派がペトログラードに於て政權を握り、トランス高架索に對してもその主義の實行を強ひたのであつたが、彼等はこれに從はなかつた。そして、チフリスに假政府を建てゝこゝに獨立の宣言を發したのである。

高架索は以前から社會民主黨の勢力が盛んで、勞兵會の會長であつたチヘイゼや、臨時政府の大臣になつたツエレテーリなど共に社會主義者として有名な人々で、現在は高架索國の代表者としてパリにゐて活動してゐる

る。勞農政府に依る中央執行委員會副會頭も、高架索人であると言はれてゐる。

十一　猶太・自由を得たり

＊

歐米諸國に於て一番厭がられる民族と言へば、それは猶太民族である。米國で日本人が排斥され、亞弗利加種の黑人が虐待されると言つたところで、猶太民族の厭がられてゐるのに較べれば何でもない。その辯一方に於る猶太民族の勢力の大きいことは非常なもので、それと同時に彼等は大へんな金持だと言はれてゐる。

そも猶太民族とは何ものであるか。

＊

西暦紀元前十世紀の頃に、パレスチナ地方でユダヤ王國を形成して繁華を極めたセミチック種族の子孫が、この猶太民族である。

首都エルサレムが落城し、その王國が最期を遂げてしまつてからも、彼は尙エホバの神の選民であるといふ信念固く、亡國の民として、漂泊の民として、また異教徒として至る處に迫害を受けつゝも、彼等はその鄕土を去つて歐亞の各地に散在繁殖して、もう二千年になる。そして現在の猶太人の人口は殆んど一千二百萬に達してゐる。數年前の外誌に發表されたその大略の分布を示すと、かうなる。

露西亞	五、一一〇、五四八
墺太利	一、二二四、八九六
匈牙利	八五一、三七八
獨逸	六〇一、八六二
英國	二四〇、〇〇〇
佛蘭西	一〇〇、〇〇〇
巴爾幹諸國	五〇〇、〇〇〇
北米合衆國	一、七七七、一八五

彼等の鄕土なるシリア、パレスチナ地方には僅か十萬人ほどしか住んでゐないのである。

露西亞には五百萬人から住んでゐる。こゝで特筆して置かねばならないのは、露西亞では猶太人の民住地を法律を以て制限してゐたことである。彼等はその限られた土地から以外に出ることを許されなかつたのである。許された土地といふのは主として小露西亞及ひこれに隣接する諸縣で、小露西亞は猶太人の巢窟であつたと言ふことが出來る。

露西亞は、かくの如く法律に依つて彼等の居住地を制限し、處々の小都會に集中せしめてゐるが、墺太利に於ても獨逸に於ても、また北米合衆國に於ても、法律で制限されるまでもなく、彼等は都會に集つてゐる。紐育などでは總人口の約二割は猶太人である。

十一　猶太、自由を得たり

なぜ彼等は都會に住まうとするのか。過去の久しい間彼等は全く他種族から隔離され、土地の所有を禁止され、商業以外の職業に從事することを許されなかつたので、自然都會以外にその活動場を見出し得ず、斯くは都會に集中するやうになつたのである。

＊

猶太人は他の歐洲人に比して驚くべきほど強い繁殖力を持つてゐる。寒帶でも熱帶でもどしどし繁殖して行く。かくの如くして進んだなら將來に於る彼等の勢力は隨分大きなものになるであらう。

彼等の多くは現在では、英語を語る者が追々增加してゐる。老人やその他の一部の人人は昔からのイディッシュといふ訛つた一種の獨逸語を使つてゐるが、遠からずして英語がもつと一般に普及するであらう。

＊

猶太人の中にはロスチャイルド家のやうな富豪もあるが、民族としては決して富める民族ではない。彼等の商賣が多く金貸や兩替であるために、さう誤解されるのも無理はないが、東歐諸國及び露西亞に住む彼等の生活は意外の貧困を示してゐる。

然し西歐諸國及び米國に住む猶太人は一般に平均して財產を持つてゐるものが多い。

＊

露西亞に於ては、かつてボベドノスチエフといふ國粹論者が東露猶太人

の將來に對する宣言の中で『彼等の三分の一は移住し、三分の一は餓死し三分の一は改宗に依つて救はれる』と言つた如く、猶太人に對して自分等と同一の權利を與へることが自國の滅亡を意味する如くに解釋してゐた者が多かつた。

キシネフの猶太人虐殺の張本人と目されるプレーヴェは、虐殺の理由として猶太人青年の革命思想を擧げ、彼等がなほ革命思想を棄てないならば政府は悉くの猶太人を殺戮すると言つた。

千九百五年十月三十日、政府は全國に滿ちあふれる程の革命運動のために止むを得ず勅令を發して憲法發布を約束したのであるが、その翌日警視廳は密かに命令を發して、猶太人及びインテリゲンチャの虐殺を計畫したのであつた。そのために生命を失つた者三千、傷ける者一萬と言はれてゐる。政府は斯くの如くして革命運動を抑制しやうとしたのであるが、露國革命と猶太人――その間に何ものか重大な關係のあることを思はざるを得ない。

＊

露西亞に住んでゐる猶太人の總數が、全猶太人の殆んど半數に近いことは前にも述べた。この多數の猶太人は波蘭分割の結果露西亞人となつたのである。

波蘭は、各地の猶太人がこの國へ流れ込んだのに見ても分る通り、猶太人に對してはひどい惡意を持つてゐなかつた。十六世紀の時代にはこの國

に於て彼等は、自治を認められたほどで、波蘭人からは幾分の迫害を受けたこともあるが、王初め諸侯はこれに對して厚意を以て待遇したのである。

露國に分割されてからは、露西亞人そのものは別段彼等に反感を持たなかつたのであるが、政府は非常に嫌厭した。そのために人民さへ段々との傾向に捕はれて行つた位である。

政府は憲法に於て信教の自由を定め、臣民の權利享有はその信奉する宗教に依つて差別はない、と言つてゐながら猶太教を信ずる猶太人を除外例とする但し書を添へたり、前述の如くその居住地を制限したり、各地の大學では猶太人の學生數にも制限を加へたりしたのである。

＊

かくの如き壓迫を加へられて來た猶太人がかくの如き專制政治を呪ひ、その破壞を叫ぶに至つたのは當然である。

彼等の間の一大勢力であるブント（露西亞リトアニア波蘭にわたる猶太人勞働組合の略稱）はその最後の目的として、專制政治の覆滅と民主的政體の創立を企てゝゐるのである。猶太民衆の八割は革命化したと言はれてゐる。一般の民衆でさへ、さうであるものをインテリゲンチヤの間には一層革命思想が浸潤したのである。西部露西亞の革命黨員の中その九割は猶太人だとも言はれてゐる。

＊

露西亞革命の首腦たる勞兵會の幹部は、その多數が猶太人ださうであ

る。トロツキーは正しく猶太人だし、レーニンも猶太人だといふ噂である。猶太人ばかりの手で成立してゐる政治團體が露西亞に二つある。その一はシオニストである。その二はブントである。

シオニストは未だ大きな勢力を得るほどのものになつてゐないが、その中に社會主義シオニズムのあることを忘れてはならない。

この主義を奉ずる者は言つてゐる――自分達はパレスチナに社會主義的の社會を建設しやうとする。そのためには先づ猶太人全部が社會主義者とならなければならない。そして、自分達がその地に行くまでは、歐洲諸國の政府で若し自分達の主義を認容しないものは悉くこれを破壞しなければならぬと。

この主義を唱導するものは男女學生で、未だ勢力は微々たるものであるが、危險性を帶びてゐる。

ブントは、專制政治の破壞を企てるばかりでなく、社會的革命を主張してゐるものである。その主張するところは社會民主黨と全然同一で、違ふのは猶太人自治に關する點だけである。彼等はその主張を貫徹する方法として同盟罷工と社會主義傳道の二つに依つてゐる。そして、各個罷業に依つて常に資本家を脅威し、專制政治の最後が近付たと思ふ時一般的の罷業をやらうといふのである。

社會主義の傳道は、勞働者の間に試みられるばかりでなく、陸海軍の軍人の仲間にも盛んに試みられてゐる。今回の革命に於て、容易に軍隊の援

助を得たことや、勞働者と兵卒が協力して運動してゐることなど、このプントの常からの努力の結果に他ならない。

＊

波蘭地方に於る社會民主黨員の大部分も猶太人である。波蘭の社會黨は波蘭共和國創立を理想とする國家社會主義の亞流であるが、この首領も亦猶太人である。彼等はその歴史からの關係上、また各國の猶太人に對する態度からの關係上、深く社會主義との關係を有するに至つたのであらう。

今度の大戰に際して、猶太人が喜んで露國軍隊の一部として獨逸と戰つたのは、勿論露西亞そのものゝためではなくして、このことに依つて自分達の自由を得やうとしたからである。その結果として、彼等は漸く土地所有權、株式會社の重役たり得る權利、戰時避難民の自由居住旅行權を得たのであるが、彼等はなほ猶代人の制限撤廢、猶太人區劃の撤廢、修學の自由、職業の自由、ヘブライ語新聞發行許可等を望んだのであつた。

革命が愈々成つて、第一次の假政府は遂に民族的制限撤廢を宣言し、初めて猶太人の眼前に自由の天地が展開したのである。

＊

こゝに於て、外國に逃亡してゐた革命黨員の中の猶太人は氣を安んじて歸國して來た。その中にはトロツキーその他の過激派の連中がゐて、後の過激派政府の根本をなした。

彼等は千九百十八年の當初、全露猶太人大會を開催して一部の人々が自

治權獲得に努力してゐることを示した。

元來猶太人の間に於て彼等自身に關する運動に二種あつた。その一はパレスチナに歸還せんとするシオニズムの運動で、これには同じ民族間にも隨分反對論者があるらしい。その二は民族自治運動である。この運動に從ふ人々は、シオニズムは到底實現することは出來ない、そんな空想的な運動をやるよりは、露西亞にゐて自治を獲得することに對して努力する方がいゝといふのである。

＊

今回の革命に依つて、猶太人に對する一切の制限が撤廢され、猶太人も露西亞人も全く平等になつた。それに、近くパレスチナに猶太國が再建されることになつてゐるから、中には新しき猶太國に歸る者もあるだらうし、また歸らずに從前の通りに活動を續けて行く者も多いであらう。

十二　民族と國家

＊

歐洲を中心として大略の民族主義運動は以上に記述した如くで、この他に未だ述べなければならないものがあると思ふが、各民族に就ての個々の記述はこの位にして止めて置くことにする。

要するに民族主義は現代世界の到るところを風靡してゐるのである。チエック・スロヴァックが建國を宣言した。猶太國も再現しやうとしてゐる。

この民族主義はデモクラシーと類似するものであるけれど幾分相違する點もある。デモクラシーと同じく軍國的ではなく平和的であり、貴族的ではなくして平民的である、一部的ではなく社會的である。民衆の力を認めるに非ざればこの民族主義は成立することが出來ないのである。只、これは民衆の個人力を認めるといふよりは、民衆が民族としての力を中心としてゐる。民族の保存、生長がその何よりの目的であり、理想とするところである。國土を中心とするのではない、又個人を中心とするのではない、國といふものゝ存在を意義あらしめるために、民族そのものを何ものよりも大切な要素としてゐるのである。

「こゝに一言して置きたいのは「民族」と「人種又は種族」との差である。これに關しては言語、宗教、傳統などが重大な要素となるのであるが、愛蘭人は英國固有の人々と同じく英語を用ひるけれども同一の民族ではなく、猶太人は、佛國に住む者は佛語を、英國に住む者は英語を、露國に住む者は露語を用ひるのであるが、これを異つた民族として見ることは出來ない、それは共同の歴史を持ち、共同の文化を持つがゆゑである。

單に言葉に依つてのみ、又は單に傳統に依つてのみでは民族區別の標準とすることは出來ない。これらの要素を合せて考へると大體に民族の觀念を作ることが出來る。

種族と言ひ或ひは人種と言ふのは、普通血緣の極めて遠いところで分け

た觀察で、黑、赤、白などと大略に分けるのである。

政治上の問題となるのは多くの場合、種族より民族の方である」。その形式も隨分複雜であるがその最も簡單なのは一民族一國家の場合で、日清戰爭以前の日本の如きそれである。今でも場末の小國には斯くの如き種類のものがあるけれど、殆んど總ての國は幾つかの異民族を含み、同一民族は幾つかの國に分屬してゐるのである。

後者の一例としては、獨墺露三ケ國に分在してゐる波蘭民族を擧げることが出來る。この場合に起る問題は普通、民族統一主義である。波蘭の如きも常に同一の國家として統一獨立せんことを欲してゐた。そして自然獨露等の內政に頗る影響した。そのためにこの民族に對して壓制的に同化政策を採るに至つたのである。一方に統一の傾向があると他方にこれを妨げる原因があり、この二つの爭ふ勢力の消長に面白い政治上の事實が現れる。

一國が數種の民族から成る場合、その民族の勢力に强弱の差があると色々の問題が發生する。この場合に於ては文化の優等なる民族卽ち支配階級たることが原則である。支配階級たる民族が文化の點に於て他の民族に征服されたといふやうな例もあるけれど、普通優等民族は同時に支配階級である。

この場合に起る問題は、支配階級の側からは同化政策が行はれ、被支配階級の側からは分立の傾向が現はれる。國內の統一は異民族の同化に依つて得ることが出來る。現代にあつて國內の統一は何よりも大なる武器であ

る。然しこの同化政策は多くの場合壓制に流れ、完全に効果を收め得ることが少ないのである。

被支配階級の間には、單に分立の傾向が現はれるばかりでなく時としては協同の傾向の現はれることもある。これは經濟的利害關係の一致からして起ると言へる。この點からして異民族が立派に協同生活を續けてゐるものにアメリカ合衆國がある。これの如きは一の獨立民族を形成せんとしてゐる位に完成したものである。

民族分立の結果、政治上の難關に漂つて來たのは墺匈國であらう。

＊

墺匈國は約十二三種の異民族から成る結合體で、不自然にして不合理なことは常に國内に紛擾の絶えないのに見ても明かである。この國では支配階級たる獨逸民族の墺人と、マジャール民族の匈人との總數二千萬に對して、被支配階級たるスラブ民族とビルマ民族との總數三千萬である。かゝる内部的の不合理に加へて、外部からは汎スラブの運動が壓迫を加へるのであるから、内治外交共に如何に困難であつたかは想像するに難からぬのである。

從來墺國側はこの二國の結合を聯邦的帝國と解釋し、匈國側は、偶然同一の君主を戴き便宜上或る政務を共同處理するだけの關係であると解釋してゐる。元來墺國には墺國の政府があり、匈國には匈國の政府があり、只軍事外交財政を共同の事務として取扱つてゐるのである。

墺匈二國が仲爭つてゐるはがりでなく、その二國それ〴〵の國内に於ても多くの民族的爭鬪がある。匈國では、クロチアが匈國人を嫌厭しこの支配の下にあることを好まず、その束縛から逃れやうがために樣々の手段をめぐらしてゐたのであつた。

墺國に於てはボヘミア民族と獨逸民族とが爭つてゐる。ガリチア地方に於ては波蘭民族とルテニア民族とが爭つてゐる。

＊

問題は枝葉にわたるかも知れぬが墺匈國の例の出た次手に、墺匈國の崩壞に就て書いて置きたく思ふ。

佛蘭西の一歷史家は十數年前に『われらは巴爾幹問題のために殆んど一世紀の間を費した、もし何時かこの問題が解決されるとするならば今度は墺匈國の問題に就て考へなければならない』と言つたことがあるが、今回の大戰に依つてこの二つの問題は共に解決されるに至つた。そして墺匈國は遂に崩壞したのである。

墺匈國の崩壞――これは戰爭以前に於て既に改造されるか、解體されるかの運命に陷入つてゐたので、今更驚くまでのことはないのである。これを一種の聯邦組織に改造しやうといふ議論が當時盛んであつたが、着手しないうちに大戰が勃發してしまつた。

崩壞、もとより戰敗の結果であることは言ふまでもない。が、なほチエツク族やユーゴースラブ族の獨立運動が盛んになり、聯合國がこれを援助

したことを忘れてはならない。かくと見て政府は聯邦制採用の詔勅を發して帝國の崩壞を防止したのであるが、チェック族等の目ざすところは聯邦に非ず獨立で、進んで獨立を宣言し、各國政府からもその獨立を承認されたので、この詔勅は何の効をも奏せず、かへつて分立の機運を早め昨年十一月皇帝が退位するや全帝國は崩壞するに及んだのであつた。

*

かくて遂に墺匈國は分裂し、北にチェック・スロヴァック國が興り、南にユーゴー・スラブ國が興り、匈牙利は全く墺國から分離されるのであるが、その結果今まで千百萬方哩の面積を有し、二千八百餘萬の人口を持つてゐた墺地利は一朝にしてその面積は僅か五萬内至六萬方哩、人口は約六百餘萬の微々たる國にならなければならなくなつたのである。

十三　君主中心より民族中心へ

*

漂泊の旅を續けつゝ一定の土地に住むことのない民族にあつては、その酋長に對して愛敬の心は持つけれど、國土を持たないがために愛國の心は持ちやうがない。一方北米合衆國の如きは、その祖國その文明に對する自尊自信は非常に強いけれど、あくまでも個人主義的で、奉公の美德など皆無である。

この愛國心は、その民族が一定の土地に久しい間を過して初めて發生す

るものである。この精神は四方海であるとか、山を以て四面を圍まれてゐるとか、交通の不便な地域をその居住地とする民族に於て愈々強い。それに反して肥沃の平原に住み、商業を營んでゐるやうな民族に於ては、それ程強い愛國心を見ることは出來ないのである。

＊

然し「愛國」そのものには二つの概念があつて、その一は勤王心、他の一は所謂愛國心であるといふことが出來やう。そして民族に依つて、あるものは愛國心はありながら勤王心を缺き、あるものは勤王心を持ちながら愛國心を缺くことがある。これは必らずしも兩立するとは限つてゐないのである。

が、土地と人種とが合致してその國民に愛國心と勤王心とを共に起させるやうな場合にあつては、その國民の精神上の勢力は隨分大きいものであるに相違ない。

同一の民族で同じ言語を用ひ、同じ信仰を奉じ同じ風習の下にあるといふ點に愛着の念を起すものもある。その制度の美に愛を感ずる場合もある。その歴史が生み出した英雄豪傑を尊敬し、これに依つて鼓吹される民族的感情もある。

然し、人種や言葉や風俗の同一といふことが國民を形成する上に何よりも必要な要素であるとは言へない。國民は、精神的の團體であることを忘れてはならない。

昔の愛國心は、殆んど勤王そのものであつた。個人的であつた。一國の代表者としてよりは君主一個人に對するそれであつた。現代にあつては單に君主に對する勤王心より、國家に對する愛國心の方が一層發達して來た。

昔の君主は、一切を國家の附屬物と見る風習があつたけれど、現在はさうでない。たとへ君主とは言へ、勝手に土地人民を分割することは出來ない。現代の文明は國民各個人の意識を愈々強烈ならしめつゝあるゆゑに、個人意識の生長に伴つて國民の意識も生長し、具體的個人的であつた愛國心は、次第に抽象的團體的となる傾向を示すに至つたのである。

*

然し、君主中心主義から民族中心主義となつた現代の愛國心の中には、自國の膨脹のためには外國を犧牲に供してもいゝといふやうな極端な國家主義を主張するものが發生し、その弊害は漸次に增大せんとするが如くに見えたのであつた。

こゝに於て或る一派の人士は、所謂愛國心は、進歩した現代の文明人の理想が要求するところを十分に滿すことの出來ないものとし、徒らに外國を敵視するやうな僞愛國心は言はずもがな、他國民に惡い影響を與へることなしに自國の利福を得やうとする眞の愛國心をも排斥するに至つたのであつた。

最近、思想を憧憬する主潮が、世界的經濟組織の發達と共に、精神的にも物質的にも、次第に人類の國際的感情を進めやうとしてゐる。今、世界

には國民的流潮と、國際的の流潮とが相携へて文化の大勢を指導しつゝあるのである。個人の生長が他の個人の助力を要する如く、一民族も亦孤立のまゝでは發展することは出來ない。人類一般に就て見ても、各民族は相互にその長所を學び短所を補ひ合つて行くのが最も利益ある行き方である。

民族を愛する心と、人類を愛する心とは決して兩立しないものではない。われらはわが民族を愛すると共に、協同文明の寄與者である處の總ての民族に相當の尊敬を置くことが出來る。要するに愛國心とは各國民それ〴〵の特殊の民性を愛することである。民性の發揮は相互の研磨に依つて得ることが出來る。そして、これは又人類一般の目的を遂げる道である。各國民の墻を撤廢し、各自の特長を沒却しては到底人類の進歩を見ることは出來ないと信ずるのである。

十四　日本と民族主義

イスラエル・ツアングウイルはその著『民族主義の原理』に於て、民族主義とは政治的事實に照應する民族の精神狀態である、と言つた。

コロンビア大學のビーア教授は、民族主義は心理的事實である、と說いた。

ホーランド・ローズ博士は、民族主義とは丁度形作られそして決して二度と形作られない心情の連結で、征服し破壞すべからざる精神的概念であ

る、と言つてゐる。

アーノルド・トイシビー氏は、一群の同一要素が民族主義を作ることが出來るけれど、そこには何等の外觀はない、と科學的に說明してゐる。

然し、この民族主義は昔から存在したものであることを一言して置きたい。世界の歷史は民族主義の消長に依つて起つたと言ふことが出來る位で古希臘の歷史もそれである。古羅馬の歷史もそれである。

只、國が强大になると民族の結合といふことを忘れて、勢力あるものゝために侵略的となり、軍國的となり、その社會は階級的となり、政治は貴族階級の掌中に握られるに至つたのである。それに對しては近世の世界は平民的色彩を增すやうになつた。

一の國家と言つてもそれが唯一の民族から成立つてゐるのではない、幾つかの民族の結合體であるのが多いのであるが、かゝる場合にその民族はその國家に抱擁されてゐるに過ぎず、一の大民族として出現するやうにはならなかつた。

近代に於て漸くその誤りであることを自覺するに至つたのである。そして今回の大戰に依つて民族主義は復活したのである。そして世界の各方面に盛んに實行されつゝあるのである。

民族主義復活の大きな原因が、今回の大戰に係ることは言ふまでもないが、なほ哲學や思想が復古的になつてゐたことを忘れてはならない、新理

想派の哲學が最近に於て世界の思潮を風靡したことは殊に、原因の一として特筆すべきであると信ずる。

＊

余は最後に、民族主義と日本との關係に就て記述することを忘れてはならなかつた。

日本は從來他の民族を併合してもこれをよく同化し得る點に於て、それが決して異民族を侵略壓迫したものでないことが分る。日本民族はその昔蝦夷民族であつたか、隼人民族であつたか、誰も知ることの出來ないほど總てが融和されてゐる――これ卽ち民族主義の正しき利用の結果である。

日本の社會制度が階級的になつたのは支那朝鮮からの影響で、元來は決して階級的ではなかつた。純日本の社會制度は皇室を中心とし、國民はこれの周圍を保護してゐるのである。民族組織で家によつて皇家に仕へる職業があり、國民は才能次第で皇家を保護するところに、上代民族制度の精神が存在してゐる、これは職業本位で階級本位ではなかつた、そして國民は總て平等であつた。

日本は家族制度も、皇室と國民との關係から起つてゐて、從つて民族中心である。家族制度はその制度如何に依つて、個人の對國家對民族思想が違ふ。日本の家族は家族そのものが本位でなく、皇室本位で成立してゐる。だから日本の舊來の道德の中で『忠君』といふことが最も重大視され、萬一忠孝兩全を行ふことの出來ない場合には孝を棄てゝも忠を採るといふ觀念

がある。

皇室に於ても、國民を最もよく支配し、最もよき政治を布き給ふ方が天皇となられたのであるから、わが國の歴史ほど歴代の主權者が國民を愛せられたものは他の國には無い。これは皇室が家族本位でなく民族本位であることを證明してゐる。

日本人は祖先を崇拜すると共に、子孫を非常に愛してゐる。これは建國以來日本がその民族を發展させることに常に留意し、これに依つて皇室を守らうとする點、善種學的の學理から言つても、こゝにも民族主義が實現されてゐるのである。

日本以外の民族には、わが國の如き皇室を有するものがない。だからその民族主義は復活しても單に共和的であり、或は社會主義的であるが、わが國はかゝる神聖なる皇室を中心として既に數千年に亙つて民族主義の上に生きて來たのである。明治維新の精神も亦この民族主義に存した。われら日本人は建國の古昔に遡つてみれば、そこに皇室を中心とした立派な平等的民族主義の存在したことを知ることが出來るのである。

十五　民族自決一括

＊

大戰が終結を告げて二度目の春を迎へた今日、われらの最も興味を感ずる處の問題は大戰の歸結と世界の改造とである。

大戰の結果として獨逸の軍國主義が根本から轉覆させられたのは誠に喜ぶべきことであるに相違ないが、一方獨逸、露西亞、墺匈國の三大國が一瞬にして崩壞し、恐るべき過激思想が到る處に侵潤しつゝあるを見る時戰慄せざるを得ないのである。

デモクラシーは軍國主義を倒した、然し果してよく過激思想を倒すことが出來るであらうか。國際聯盟は國際戰爭を防止することは出來るであらうが、果してよく階級戰爭を防止することが出來るであらうか。

國際聯盟と言ひ、世界改造と言ひ、その理想は實に美しいものである。然しこれを完全に實行することの出來るのは果して何時のことであらうか。それよりも當面の急務は、この世界の狀態を一日も早く恢復することであらねばならぬ。世界改造はその後でよい。

＊

世界大戰の主潮が民族主義であるといふことは前にも述べた。余はこゝに再びこの言葉を繰返すのである——

世界大戰の主潮は民族主義である、と。

そしてこの戰爭の發端が民族主義に發したのであるから、戰後の解決も亦民族主義の上に立つのが理想的であると信ずるのである。

民族主義！

民族主義！

これが今後の國際政局に於て一の茫大なる流れとなつて流れるものであ

ることは論ずるまでもなく明かである。

こゝにペンを措くに當つて余は以上の記述を簡明に、見易く組み立てゝ置かうと思ふのである。

＊

1　千九百十四年六月二十八日、セルビアの一青年が墺匈國の皇儲に向つて爆彈を投じた。世界大戰はこゝにその火蓋を切つた。

2　各國の參戰には、それ〴〵相當の理由のあることながら、共通した大きな原因の一つは各國が民族主義に立脚したことである。

▼露西亞の參加はスラブ族のためであつた。

▼希臘は土耳其領にゐる希臘人援助のために參戰した、など。

3　國土を失つてもそれが國家の滅亡ではないこと、國土を侵略してもそれが民族中心でなければ眞の意味でその國が大きくなつたとは言へないことがハッキリ分つた。

▼獨逸が佛國侵入の際、中立を侵された白耳義はその國土の殆んど全部を失つたけれども、猶ほ獨立國として立派に存在してゐた。

▼セルビアは一時全くその國土を失つて、希臘の一島に政府を置いたのであるが、事實セルビアは滅亡しなかつた。

4　これらの事實が幾多の亡國民族を自覺せしめた。そして波蘭やチユツク・スロヴアツク民族などを初めとして獨立の運動を開始した。

5　かくの如くして民族主義は大きな勢力を以て擴がり出した。民族主義は同一の言語同一の血液、そして出來得るなら同一の信仰を標榜した。これらのものを要素として初めて强固な國家を建設することが出來るといふのである。

6　千九百十五年九月、瑞西チムメルワルド市に開催された國際社會主義者大會に於て初めて民族自決主義が唱へられた。これを平和締結の要件とし、弱小民族を自由開放せねばならぬといふことを決議した。

7　露西亞革命勃發するや同國社會民主派は民族自決主義を採用し、勞兵會を經て各國民に對し、民主的平和締結の條件として無併合無賠償民族自決主義を提議した。

米國大統領ウヰルソンがこの條件に贊成の意を表した。

8　民族自決とは、民族主義的整理に關する一の手段である。各民族はその欲するところに從つて、自己の政體を定めることが出來る、また獨立か從屬かをも定めることが出來るといふのはその主張である。

また、領土の變更は住民の一般投票に待つといふのであるから、これを理論として見る時は首肯することが出來るけれと、實際に於ては理想通りに出來るであらうか、どうか。

また、民族自決と言つても單に弱小民族の自治のみを意味するのではなく、同民族との協合をも意味する。

❾ 露西亞はこの主義を唱導しただけであつて國内の各政黨はみなこの主義を認め、國内の民族は盛んにこれを謳歌して續々と自決の形式を發表してゐる。

これを要するに民族自決主義は、從來專制の下に久しい間を忍耐して來た異民族中の幾分勢力あるものをして爭つて奮起せしめたのである。その齎すところの結果は未だ詳かでないけれども、兎に角今回の世界大戰に次での各民族の獨立自治は特筆大書すべき事件であり、これに關して民族自決主義が如何なる理由ありとも忽せにすることの出來ぬものであることは今讀者諸賢の胸裡に於て明かであると信ずるのである。

民族自決主義　終

見よ新時代を飾る新智識
の寶玉は玆に燦然として
無限の光輝を放てるを！

……自第一編……
……至第十二編……

⊙最新學藝叢書十二冊完成

瓦の大は玉の小に如かず
各冊ポケット形携帶至便
一冊僅に金卅五錢の廉價

大正九年一月十六日印刷
大正九年一月十九日發行

定價金參拾五錢

不許複製

最新學藝叢書
第十二篇
民族自決主義

著者　坂井正一
發行者　東京市神田區三崎町三丁目一番地　池田憲之助
印刷者　東京市神田區西小川町二丁目六番地　宮田龜六
印刷所　東京市神田區西小川町二丁目六番地　大成社印刷所

發行所　東京市神田區三崎町三丁目一番地（西通）　學藝書院
電話番町七四二番
振替東京四六九七九番

平易簡明

最新學藝叢書

各冊讀切

第一編 國際聯盟 全　法學士 野口直人先生編

第二編 世界的思想 全　文學博士 大類伸先生編

第三編 勞働問題 全　法學士 吉岡淡水先生編

第四編 デモクラシー 全　文學士 青木健作先生編

第五編 現代の歌劇 全　文學士 小林愛雄先生編

第六編 罷業と怠業 全　法學士 野口直人先生編

一冊 タツタ三十五錢 送料二錢

發兌 東京神田 三崎町三ノ一 學藝書院

9.2.23

389
3

終